

『権力と栄光』について

— 日常性と非日常性 —

植木利彦

倉敷芸術科学大学教養学部

(1995年9月30日 受理)

I

私たちは、通常、何の疑念も抱かず、この平和な日々がいつまでも続くものと無意識のうちに期待しているところがある。過酷な運命に晒されたことのない私たちにとっては、この平穏で静かな日々がごく当り前の日常性となっているように考えられるが、人間の過去の歴史を紐解くとき、そこには過去において何度となく正義の名において、或は大義名分を掲げて、目を被いたくなるような残虐な行為が行われてきたことが思い起こされる。また、自然界の弱肉強食の世界に目を向ければ、そこでは生き残るためには全ての行為が是とされていることを知る。そうした現実を思い浮かべると、たちまちにして私たちの平穏な日常性は虚構の世界であることを、つまり、暴力と破壊、無秩序と混沌といった日常性の中の一瞬の静寂、もしくは平安であると思われ知らされるのである。すなわち歴史的時間、自然界の掟から見れば、平安や秩序は、暴力的な日常性と比較するとき、非日常的な性質を持つものであると同時に、この非日常性は暴力という日常性の延長線上に一時期存在するに過ぎないことが容易に理解できる。

日常性と非日常性との錯覚、もしくは逆転という環境の変化は、時として私たちにそれまで気付かなかった人間性の実相をかいま見せてくれることがある。この小論では *The Power and the Glory*¹⁾ の日常性と非日常性がウィスキー司祭の人間と社会に対する認識にどのような変化を及ぼしたかの分析を試みたい。

II

宗教というものは洋の東西を問わず、人が生きている限りこの世に存在するというよりも、なくてはならないものなのだろう。どのような原始的な共同体にも神、司祭に当る呪術師のような人物が存在する。しかも神との交霊にあたってはいろいろな儀式が執り行われる。そうした儀式の一つ一つの行為は元来はそれぞれ特有の意味を持った神に対する敬意の表現の仕方であったのであろう。だが時間の経過とともにそうした本来の意味は忘れ去られたり、顧みられることなく、形式のみが重んじられ、儀式のみが益々華美になっていくのはある面では仕方のないことであり、自然なことなのかもしれない。何故なら厳粛

な儀式、荘厳な雰囲気というものは神の偉大さを、その力を我々により印象づけるのに適しているようにも思えるからである。従って、形式主義に陥っている宗教があったとしても、それはその宗教の歴史の長さや基盤の安定の証明といえるかもしれない。一方、宗教が形式を重んずるあまり、形式のみに拘って、本来の儀式の純粋な意味が薄れて、嘗ては神と直接的に行われていた霊的或は精神的な交わりを軽視する結果となっているともいえる。これは形式というものが時間の経過と共に一つの日常性を獲得したことを意味する。

グレーム・グリーン(*The Power and the Glory* (1939))に描かれているカトリック教会はまさにそうした長い歴史のなかで生き抜いてきた宗教であった。その結果、時間の経過と共に形式主義が日常性を増していったことは確かであろう。グリーンは宗教弾圧が行われる以前のメキシコにおけるカトリック教会そして司祭たちがどのような日常を送っていたかを具体的に記述しているわけではないが、貧しい幼年時代を送った主人公の司祭が牧師になって出来るだけ多くの献金を集め、立派な教会関係の建築物を建て、教会に貢献し、上層部から認められて出世をすること、その結果、金持ちになり豊かな暮しをすることが夢であったことや、司祭を逮捕することに情熱を傾ける警部の、教会が有産階級のご機嫌を取り、貧しい人々から献金というかたちで金を吸い上げ、貧しい者にこの世での辛苦に耐え、来世での幸せを願うように説得しているとする教会のご都合主義に対する憤怒感からも大凡の見当はつく。

日常的な形式主義に陥っているのは教会や司祭職に在るものだけではない。信者たちも形式や仕来たりを守り、敬虔な生活態度を維持していれば、神との直接的な霊的交信を経験しなくとも立派なカトリック教徒であると錯覚しているようである。例えば、余りにも立派に仕立て上げられた聖徒物語を真に受けているルイス少年の母親や、宗教書を持っていたために牢獄に入れられ、しかもそのことを誇りのように感じ、牢内での若い男女の行為や司祭の態度に立腹し司教に報告してやると息巻く信心深そうな女は、世間知らずといえればいいのか、少女の域を出ていない大人といえればいいのか、ともかくその典型といえるだろう。彼女たちは安全な生活の上に築かれた秩序、——それは我々の肉体の上に被せられた衣服と同じ様な外観を飾る外皮に他ならない——道徳観や倫理観を絶対的なものと信じて、それらの下に隠されている人間の根源的な相と世界の無秩序とが見えていないのである。ウィスキー司祭自身も牢獄に繋がれて、死の恐怖、そして牢獄の中で展開される赤裸々な人間の姿に直面するまではそうした真実を認識することはなく、彼女たちと同じ領域の中に生きてきた人間だったのである。更に子供たちに読んで聴かせる殉教者の話に窺える如く、理想的な聖徒は熱心な盲目的信者が事実を曲げて美化したものであり、彼等には物の本質より外観がより大切なのである。理想主義は現実の醜い姿を本人の目から遮ってしまう高い壁のようなものである。それは人間の根源的な実相と現実を理解させることとは直接結び付くものではない。過去においてはルイス少年の母親に侮辱されていたウィスキー司祭ですら処刑されたその日に早や彼の実際の姿とはかけ離れて、“Yes. He was one

of the heroes of the faith.” (p.264) と英雄に祭り上げられつつある。彼も近い将来、ルイスの母親が娘に読んで聴かせているファンという架空の聖徒と同じ様な人物に作り上げられていくのであろう。又、小説の中に描かれているキリスト教の信者たちも自分の犯した罪を強く意識して、心の底から自分の犯した行為を恥じ、反省しているのではなく、司祭に対する敬愛のしるし、或は習慣、もしくは日常的な形式としての告解の行為を繰り返しているに過ぎない。つまり、告解という行為を是非とも行いたいと思う精神的な切迫感があるのではなくて、日常的な形式、或は過去の例に習った結果が大切なのである。従ってレイル氏の町でも信者の告解を聴きながら、司祭はそれを何の真心も籠らない日常的な形式だけの“show”に例え、うんざりしながらブランディーを嘗め嘗め聴いている。

There had been a continuous stream of penitents from eight to ten - two hours of the worst evil a small place like this could produce after three years. It hadn't amounted to very much - a city would have made a better show - or would it? There isn't much a man can do. Drunkenness, adultery, uncleanness: he sat there tasting the brandy all the while, sitting on a rocking-chair in a horse-box, not looking at the face of the one who knelt at his side. (p.205)

この町での平和な生活と信仰はレイル氏の妹の世界、則ち、形式と美しい虚構が日常化していた司祭の平和な過去の世界と同じ世界なのである。町の人達は司祭と出会うと、帽子を脱ぎ、ひざまずいて、彼の手にくすをする。

it was as if he had got back to the days before the persecution. He could feel the old life hardening round him like a habit, a stony cast which held his head high and dictated the way he walked, and even formed his words. (p.200)

ここでも ‘the habit of piety excluded everything but the evening prayer and the Guild meeting and the feel of humble lips on your gloved hand.’ (p.202) このような生活は、ここ数年、逮捕されれば殺されるという危険に常に晒され、犬と僅かな肉の付着している骨を奪い合い、インディアンの母親が亡き子供のために残していった砂糖の塊を失敬せざるを得ない空腹というきびしい現実を経験し、人間の尊厳など跡形もなく消え失せることを知った司祭には非日常的な限られた世界のことと思えた。また、荒涼とした山の上の寂れた墓地まで、理不尽に殺された子供の遺骸を背負い、細い山道を二日かかりで運んでいき、子供の冥福を願ってだろうか、ひたすら十字架の前で神に祈るインディアンの母親の全身全霊を傾けた忘我の祈りの姿に圧倒されたり、農民たちの自分のためではなく、身を投げうってキリストと同化し、神を信じようとする姿に信仰の難しさを経験した司祭には、この世は暴力と無秩序と絶望 — 神に見捨てられた世界 — が日常的に支配する世界である

ことを認めざるを得なかった。それ故、外観のみを美しく着飾った生活は偽りの生活であり、形式を重んじた信仰は偽りの信仰としか受け取れなくなっている。にもかかわらず、そうした形式が日常化された世界にいと、彼自身までもがその日常性に飲み込まれていきそうになる。

He could hear authority, the old parish intonation coming back into his voice, as if the last years had been a dream and he had never really been away from the Guilds, the Children of Mary, and the daily Mass. (p.199)

彼は既に過去の理想主義、或は、形式を重んじた日常性などは厳しい現実の前では全く茶番であることを死の恐怖と共に思い知らされた。その結果あらゆる先験的なものが全て虚偽であることを認めざるを得なくなっている。則ち、司祭は州境を挟んで展開する二つの世界、一虚構の世界と原始の世界—のどちらの日常性を選択するか迫られているのである。

It was an odd thing that ever since that hot and crowded night in the cell he had passed into a region of abandonment - almost as if he had died there with the old man's head on his shoulder and now wandered in a kind of limbo, because he wasn't good or bad enough. (pp.176-7)

従って、性格的に脆いところが伺えるウィスキー司祭のような者にとっては、虚偽の日常性から脱却するためには常に過酷な現実と対峙する必要がある。生命の危険はあるが、真に神の存在、則ち司祭を必要としている人々のいる世界、無知によって生きて行くままにされている何にも守られることのない人間がいる世界、自分の欲望を満たすために他人を裏切らざるを得ない生活を強いられている人間がいる赤裸々な世界、いうならば精神の勇者のみが生きていくことの出来る世界に司祭は憧れるようになっている。

He thought that in some ways it was better over there, across the border. Fear and death were not the worst things. It was sometimes a mistake for life to go on. (p.202)

恐怖と死は決して最悪のものではなかった。一方では、レイア兄妹の住むような町はレイア氏の妹や、ルイス少年の母親、牢獄の中にいた女性たち、即ち、理想主義者が理想的な町と評価しそうであるが、そんな町は形式化された日常性が大切にされる町であって、神が必要とされる町ではない。司祭の目からすれば、そんな町は “It can be more unhappy than anything but the loss of God. It is the loss of God.” (p.206) 境界の向こう側の州の現実とは余りにもかけ離れた世界がそこに展開されている。我々はこの対比によって理想

主義がいかに狭量なもので、ひとりよがりの思い込みであるかが判る。そのことをもっとも如実に物語るのが皮肉にも司祭を追いかける警部であろう。

「警部の革の深靴もピストルのホルスターもびかびかにみがきあげられ、ボタンはみなきちんと縫いつけられていた……このみすばらしい町では、彼の一分の隙もない身だしなみは、並はずれた野心を持っていることを示す効果を与えていた。」「彼の思いつめたような、油断のない歩き方には、どことなく司祭のようなところがあった。」、と形容されている警部は貧しい少年時代から、この見捨てられたような土地ですら、司祭たちが裕福な人たちに取り囲まれ、彼等のご機嫌を伺い、一方では宗教の名を借りて貧しい人々から献金という名目で搾取してきた歴史と事実を心底嫌悪し続けてきた。警部の目には教会とその関係者の視点は常に大衆を無視してきたように映るのである。

‘They all look alike to me,’ the lieutenant said. Something you could almost have called horror moved him when he looked at the white muslin dresses – he remembered the smell of incense in the churches of his boyhood, the candles and the laciness and the self-esteem, the immense demands made from the altar steps by men who didn’t know the meaning of sacrifice. The old peasants knelt there before the holy images with their arms held out in the attitude of the cross: tired by the long day’s labour in the plantations they squeezed out a further mortification. And the priest came round with the collecting-bag taking their centavos, abusing them for their small comforting sins, and sacrificing nothing at all in return- (p.21)

神を信仰しながらも、生活の苦しきから救い出して貰えぬ人々を目の当たりにした幼い子供の頃の警部には神は無力に映ったことであろう。そして今も人々は神に帰依しながらも貧困と飢えに苦しんでいる。警部が神は無力な存在であると考えてのものにも確かに一理ある。しかしそれは警部の個人的な経験、或は印象であって、宗教の本質を正確に把握していることではない。宗教は人々に対して物理的な援助や救いを与えることもあるが、飽くまで精神的な依り処であって、信ずる者の心の平安と安定を約束するものなのである。即ち、“Man doth not live by bread only.”なのである。いうならば、現世の物理的なものと直接的な関係を持たない無形のものといってもいいであろう。目に見えない宗教の持つ意味合いと価値を理解せず、ただ幼児期の強い印象だけに囚われている警部が神を信じてはいないことだけは明かに確かである。否、むしろ神を憎んでいると言っても過言ではない。その気持ちが高じて、“It infuriated him to think that there were still people in the state who believed in a loving and merciful God.”(p.23) その反動であろうか、“There are mystics who are said to have experienced God directly. He was a mystic, too, and what he had experienced was vacancy – a complete certainty in the existence of a dying,

cooling world, of human beings who had evolved from animals for no purpose at all. He knew.”(p.23) といったような唯物論的なものの考え方をする。則ち、彼の世界には神という支配者は存在しない。その世界を平和に維持し、人々に幸せをもたらし得るのは優れた共産主義、或は社会主義という政治体制と強力な警察力であると信じているようだ。²⁾

警部は、聖徒の物語を頑に信じ、現実の多様性を認めないで自分の空想した世界のみを信じるあの信心深く見える狭量な女性たちと同じ一面を備えているといえる。こういう人間は “the priest had always been worried by the fate of pious women. As much as politicians, they fed on illusion.”(p.152) と回顧されているように現実に目を向けていない。警部は共産革命という急進的な考え方で現実から理念のみを引き離し、それらの理念に特別な生命力を吹き込み、その生命力が日常的な生活の中のものとは全くかけ離れていても、それに気付かず、その崇高さに酔っているに過ぎない。何故なら警部が指揮している警察隊の隊員は彼の理想とするものからは程遠い。

The squad of poice made their way back to the station. They walked raggedly with rifles slung anyhow: ends of cotton where buttons should have been: a puttee slipping down over the ankle: small men with black secret Indian eyes. (p.17)

それに上司の警察署長は仕事は二の次で玉突に熱中し、取り締まるべき立場にあるのに、禁制の酒を知事のいところ飲み交わしている有様である。そして行政の長である知事のいところは知事の威厳を盾に税関から禁制の酒を手に入れ売り捌き、金儲けに精を出している。一体何処に「社会の人間は全て平等であり、均等に富の配分を受ける」とする理想とされる社会主義や共産主義の若々しい生气や長所が見受けられるのか？警部の保護している社会の人々が本当に幸せに暮らしているのか？とてもそうとは考えられない。それが現実なのである。しかもそうした不正なことが警部の周りで日常茶飯事的に行われている。それでもそうしたことに気が付かないのは彼の作り上げた、或は想像している世界が彼にとっての日常性を持っているからである。それはコラルの両親が、レイア兄妹と同じく、各自の世界に生きているのと同じことなのである。警部、レイア兄妹、ルイス少年の母親、コラルの両親、牢獄にいた敬虔な女性、彼らに共通していることは、自分たちの描いている世界以外を認めようとはしない頑さである。それだけではなくて、警部は権力によって、コラルの両親は無理解によって、他の人々に恐怖や悲しみを与えるという結果を招いているのである。こうした真実を、或は現実を認識していない人々を揶揄するように、グリーンはルイス少年に対して夢の中で “the dead priest winked at him — an mistakable flicker of the eyelid, just like that.” (p.266), と殉教者となったと考えられるウィスキー司祭のイメージを借りて、理想像の裏をかくような行為を敢えてさせている。このことはグリー

ンが、我々のいう平穏な日常性とは暴力的な非日常的なものの延長線上の一部であって、決して恒久的なものでもなければ、真理でもない。我々にとっての真理とは非日常的なものであり、目を背けたくなるような醜くくて野蛮なものであると主張しているようである。従って、殉教者の話にたいしてはルイスと同じ考えで、本に書かれているほど立派な殉教者はいないと思っているし、現にウィスキー司祭の最後の姿には聖徒物語の殉教者とはかけ離れた平凡な人間の姿としての司祭が描かれている。これはウィスキー司祭を偽りの聖徒にまで高めるのではなく、過去のまるで非のうちどころのないように言われている聖徒たちをウィスキー司祭の人間的レベルにまで引き下ろしていることに意味がある。

A small man (i.e., priest) came out of a side door: he was held up by two policemen, but you could tell that he was doing his best - it was only that his legs were not fully under his control. (p.260)

ある意味ではウィスキー司祭がルイス少年の母親のような人達によってそのうち聖徒にされてしまう可能性を伺わせてはいるが、逆にこのことは過去の聖者と看做されている人達もウィスキー司祭と余り大きくかけ離れていなかった可能性もあり、我々に親しみを覚えさせるものである。これはグリーン自身の考えでもあろう。このことはグリーンは敬虔なカトリック教徒ではあるが、敢えて長い歴史のなかで気が付かないままにカトリック教会が陥ってきた日常的な形式主義に警告を投げかけているのであろう。ルーテル派のレイル氏兄妹もルイス少年の母親と宗教心においては大差はないと考えられるが、その彼等でさえ、内部批判的に、日常的な形式主義を重んじるカトリック教会に対して “We don't hold with your Church, Father. Too much luxury, it seems to me, while the people starve.” (p.193) と非難している。また、形骸化した教会に対し警部は教会そのものも牧師も、彼の独断的な考え方で、民衆に対して悪弊をなすものと決めてかかっている。

With a devotion only to the reality of the here and now, he is a rebel against all the misery and injustice and unhappiness he associates with the rule of a greedy Church and its insistence on the unimportance of the human lot in this world.³⁾

独断的な判断も間違っているが、そのような原因を生み出した教会の日常性にも問題はあったはずだ。確かに司祭の傲慢さに憤りを、人々の惨めな生き方、不幸に憐憫を覚える警部は現実的な人間のようなものである。従って、逆に幸福そうな信者に囲まれた司祭の写真を目にした時、彼は司祭に対して強い憎悪を覚えている。

The good things of life had come to him too early - the respect of his contemporaries, a safe livelihood. The trite religious word upon the tongue, the joke to ease the way, the ready acceptance of other people's homage... a happy man. A natural hatred as between dog and dog stirred in the lieutenant's bowels. (p.20)

警部は彼自身の行為が国のため、そして何よりも貧しい国民のためであると自分に言い聞かせているが、その行為は幼い頃より、宗教に対して抱き続けてきた個人的な憎悪に正当な意味付けをしているに過ぎない。R.ケリーは警部のこうした行為を“like Pinkie, who needs the goodness of Rose to complete himself, the lieutenant needs the priest to absorb his hatred and to structure his life.”⁴⁾と述べている。彼にとっては司祭一人一人の人間性など問題ではなく、司祭であることが貧しい農民を搾取する宗教関係者として警部の憎悪の対象となっているのである。つまり、警部の日常性を正当化するためには教会と司祭の日常性が警部にとっては必要となっているのである。農民たちが、彼の目からすれば、搾取されているように見え、警部が嫌悪しているその宗教を必要としていることが理解できていない。則ち、経済的な面からは、搾取されているように見えるが、精神的には彼等は心の支えとなる神を、神との霊的な繋がりを取り計らってくれる司祭—それがどのような種類の司祭であっても—とを必要としているのである。神とは社会の制度とは無関係に存在し、人間に精神的な安堵感を与えてくれる超自然的なものへの人間の原始的な願望の象徴的な存在なのである。そうした超自然的なものとの交霊が宗教であり、その媒介を司る能力を神から与えられている者が司祭なのである。従って宗教とは政治体制とは関係なく存在するものなのである。その存在を警部が彼の善とする唯物論的な考えと共産主義的政治体制とで排斥しようとするところに無理がある。神の存在を認めない現状は彼にとっては日常的なものであっても、全ての人にとっての日常性ではない。更に論じれば、実は警部は社会主義、或は共産主義という彼が絶対的であると信じている彼の宗教を他人に押し付けているようなものなのである。つまり、警部は神の存在しない宗教を信じていると言っても過言ではない。そして警部自身がその宗教を布教している宣教師のようなものともいえる。

無理な正義を押し通そうとするために、常に携帯しているピストルが象徴するように警部の正義には暴力が付きまとう。彼が宗教を麻薬のように考え、人々を宗教から護ろうとして逆に人質を取ることは人々に幸せをもたらすのではなく、恐怖をもたらしている事実を無視するわけにはいかない。彼が幸せになれると信じる主義主張を、換言すれば、彼のいう正義を人々に強要することは無謀なことで、個人の幸福観には人それぞれの思いがあるのであって、たとえ宗教が貧しい人々を救うのではなく、苦しめていると警部が考えようが、人々はその宗教を必要としている以上、それを否定するようなことはナンセンスで

ある。ある意味では “It is the lieutenant who is the trapped man, the prisoner.” (p.67) という如く彼自身が自分の固定観念に囚われているのである。同じように過去においては現実を認識していない教会関係者も「貧しい者は祝福され、金持ちは天国に行くことができない」などという戯言を真しやかに口にしていたのである。人生は警部や教会関係者がいう程甘いものではない。ほんの少し状況が変われば、誰にでも厳しい現実が待ちかまえているのである。それがこの数年のウィスキー司祭の体験から司祭には理解できているが、警部にはそこが理解できていない。従って警部の金銭と物資によって人々を幸せに導く論理に対する司祭の体験から口に出る否定的な反応が警部を苛立たせる。

The inevitability of pain and the absurdity of Utopianism are selfevident facts of life to the priest. But the lieutenant hates the priest's reasons.⁵⁾

私欲を伴わないゆえに警部は自分の行動が私的な感情から行われているのではなく、過去の教会や教会と有産階級との癒着が人々を苦しめる元凶であると考え、宗教の弾圧に手を貸していると考えている。モールス信号を司祭に教えるコラルも合理主義者であるが、警部と比較するとき、官憲に追われ、不安と死の恐怖のなかで司祭が壁に書き残した十字架を目にしたコラルは、少なくともその後の彼女についての記述、“the odd thing is — the way she went on afterwards — as if he'd told her things.” (p.257) から、死の恐怖に晒されながらも、信仰を捨てようとしなない司祭のその姿に十字架の、或は神の持つ力の不思議さを認識しているようである。則ちコラルは彼女にとっては非日常的なものにも目を向けて、それらを理解しようとする姿勢がはっきりと伺える。そういう意味でコラルの方が同じ合理主義者でありながら、警部より柔軟な心の持主といえるだろう。コラルと同じような精神的な柔軟さを見せ、既成の日常性を打ち破ることの出来るのはルイス少年である。彼は母親が妹たちに読んで聴かせる聖徒となったフアンの話と、現実に見聞きするホセ神父やウィスキー司祭の言動の落差に子供ながらに疑問を覚えているようである。それでいてウィスキー司祭がフアンのように迫害を受けて警部の手によって銃殺されたことを知ると、それまでの警部に対する憧れは一変して憎悪に変わり、逆に疑念を抱いていた聖徒の存在を信じるというように状況に応じて激しい感情と思考の変化を表している。このことはルイス少年が、妹たちとは違って、現実に即して考え感じる能力のあることを示している。次に英語で話すことのできた司祭が殺されたことによって、西洋社会との接点を断たれ、異教の地に自分一人が取り残されたことを知って、永久にこの土地を去る決心をしたテンチ歯科医師である。このように日常性を打破し得るのは、現状の矛盾を感じとるだけの感受性を持っている人々といえる。そのような人は他にも見受けられる。そして彼等に共通していることは「見捨てられている」という感情である。例えば、危険を冒してウィスキー司祭を一晩匿ったことのあるルイス少年の父親は子供に ““We have been abandoned

here……”(p.28)と語る。そして現状を打破するだけの勇気を持ち合わせていなかった余りにも小心なホセ神父は“it (i.e.,the earth) would roll heavily in space under its fog like a burning and abandoned ship.”(p.29)と感じとっている。そしてウィスキー司祭もベラ・クルスに向かう船に乗り損ねたときに“abandoned.”と感じている。このような〈打ち捨てられた人々〉については、山形氏が『グレアム・グリーンの世界』⁶⁾において指摘しておられるところであるが、これは彼らのみが《神に見捨てられた非日常的な状態に置かれている》と感じていると解釈しても良さそうである。何故なら現体制を支持している警部も署長も現状の日常性に何の疑念も覚えていない。また、敬虔なキリスト教の信者と自認している人々も彼等の日常性—神のいない日常性—に何の疑問も感じていない。見方を変えれば、死の恐怖に晒されたことのない人達は、無機的なものの存在を真に理解するとか、神との霊的な交流といったものを実際に経験するといったことはないのかも知れない。

価値観は個人が選択する相対的なものであって、自分の価値観を絶対視し、それをすべての人に押し付けるところに警部の無理、或は人間的資質の狭量さが伺える。それ故警部の善意はある意味において空回りをしていると考えられる。例えば、警部は国と国民のために善かれと思ひ、教会或は宗教を象徴する司祭を逮捕し、殺害したり、各村から人質をとる。司祭の居所を教えなければ、人質を殺害するなどということは村人に恐怖を植え付けても、彼等から尊敬の念は得られていない。現体制下では彼のこうした正当と見なされる公的な行為が誰にも喜ばれることがないどころか、逆に彼が宗教の悪弊から保護し、新しい社会へ導いてやらねばと思っている子供によって恐怖政治の象徴といえる警部ご自慢の拳銃に唾を噴きかけられる結果となるのは実に皮肉なことと言えるだろう。この警部にひきかえ、*A Confidential Agent*⁷⁾のDが、過去の制度によって維持されていた日常性が非日常的なものになり、非日常的であった殺戮や裏切りが日常的なものとなった内乱という異常な事態の中でも自分の価値観を人に押し付けるのではなく、Dの国での戦争に苦しむ国民の苦悩を理解し、政治体制に荷担するのではなく、国民を救うという只そのことだけを行動の指針としていることに、Dの度量の大きさが読み取れる。

III

この現代社会には制度や文化あるいは伝統などによって維持されている日常性と、そこに住む、我々、人間の意識下に常に存在している動物の原始的な日常性が同時に存在している。この人間に宿る原始性は人間の精神的な発達や社会の文化水準の高さとは無関係に常に人間の本性として存在する。しかしながら、ある一時期平穏で安定した生活が営まれると、我々はそうした生活が我々の日常であると思いがちであるが、過去の人間の歴史が戦争の繰り返しであったことを思い起こせば、平安な日々と暴力的な日々のどちらが我々の日常であるか即答することは難しい。また、社会の制度の結果として生じている日常性

とは社会の構成員がその社会の権力者と制度によって作為的、且つ強制的に服従させられている上に成り立つ日常性なのである。にもかかわらず、その社会の理念を社会の構成員全てにとって真実であると考え違いをし、その理念を信じ込み、日常的な生活にそれを持ち込むところに問題が生じてくる。そのような日常性が否定されたり破壊されることは時間の問題として捉えることができることは、現在のバルカン情勢やソマリア、アフガニスタンでの内乱に目を向ければ、旧体制に反抗する大衆と権力者側との暴力と殺戮が横行していることから、歴史が証明しているところである。

従って、どちらかの日常性を否定することは意味のないことである。つまり、社会であれ、人の心であれ、暴力もしくは平安のどちらかが優勢であれば、それがその社会あるいはその人の一時的な日常性となっているだけで、決して絶対的なものではない。むしろこの二つの日常性が目まぐるしく変わる葛藤の最中に人はその人間性を試され、人によっては無機的な神の存在を認識することになるのであろう。従って、あらゆる人間的な動きを一つの理念に治めようとする事自体に無理がある。否むしろ理念ではなく感性と本能によって捉えられる予測のつかない非日常的な世界が実は我々の日常的な世界の大部分であると認識し、その世界で生きる精神的な勇気を持ち、赤裸々な醜い人間の本性に接し理解することが、司祭とおなじように我々の自己認識に繋がる唯一の道であるといえるだろう。

Notes

- 1) Graham Greene, *The Power and the Glory* (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1971), 以後、同書からの引用は頁数のみを本文中に記す。
- 2) A.A.DeVitis, *Graham Greene*, revised edition (Boston: Twayne Publishers, 1986), デヴィティスは警部の支持する政府が宗教にとって代わって世俗的な秩序を強めようとしているとする。[It (i.e. government) sought to enforce a secular order in place of a religious one. (p.76)]
- 3) R.W.B. Lewis, The "Trilogy" in *Graham Greene, A Collection of Critical Essays* ed., Somuel Hynes (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1973), p.63.
- 4) Richard Kelly, *Graham Greene*, (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1984), p.54.
- 5) Kenneth Allott & Miriam Farris, *The Art of Graham Greene*, (New York: Russel & Russel, 1963), p.188.
- 6) 山形和美, 『グレアム・グリーンの世界』— 異国からの旅人 —, (東京, 研究社, 1993年, 第四章, 「力と栄光」 — 事効論の美学 —, 参照。
- 7) Graham Greene, *A Confidential Agent* (London: William Heinemann & Bodley Head, 1971).

On *The Power and the Glory*

— A Time of Peace and a Time of Violence —

Toshihiko UEKI

Faculty of College of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1995)

After the World War II, we, Japanese, have lived in peace for about these fifty years, and we suppose that it is an ordinary living condition for human beings. When we look back at the history of the world, we find out many wars recorded in history almost without intermission. Therefore we may think that the reality under violent activity is the ordinary living condition. It is very difficult to decide which is the ordinary one for us, a peaceful time or a violent one.

Anyway, sometimes it is true that the radical change of our living condition is apt to make us realize the real aspect of human nature. So, in this paper I want to analyze what influence the change of living condition of the whisky priest in *The Power and the Glory* exerted on him.